

玉城福梁(大正15年生まれ 大里・稲福)

〈陣地構築 南部避難 義勇隊 収容所 やんばるへの立退き 集落の再建〉

### ■陣地構築への動員

那覇の十・十空襲(1944年10月10日)後からは壕掘りだった。私は初め、集落の先輩の男性たちと一緒に一週間泊まり込みで小禄飛行場の拡張工事に行った。当時私は18歳だったが、50歳代くらいのお年寄りも動員されていた。

それからしばらくして、今度は読谷飛行場へ動員された。飛行場が出来上がってから壕掘りで、稲福の人達はヘンサ森<sup>ムイ</sup>に行かされた。私たちは馬車を持っていたので壕掘りはせず、壕の枠に使うために稲福の上原(現在「東雲の丘」がある付近)から切り出した松の木を馬車で運ぶ仕事をした。壕を掘るにしたがって枠を組んでいた。

大城城跡の下の壕も稲福の人達が掘った。女子青年たちはザルで手渡しして土を運び出す作業をさせられていた。壕の入口は稲福側で崖になっていて、首里に向いていた。

### ■「アメリカ軍は民間人を殺さない」と伝えてくれた隊長

稲福にいた時、大きな岩の下にあるクンザンシンズ(「国頭墓」。国頭から石俵大主の遺骨を移して造られた墓)※1のそばに私たちの壕があった。岩は大きかったので私の父がそばから掘っていた。国頭墓には<sup>あかつき</sup>暁部隊が入っていた。遺骨はそばに片づけられていたので残っていた。<sup>うえいなぶく</sup>上稲福(旧集落)には軍隊が駐屯していたが、その部隊には鉄砲もなかった。

隊長は<sup>たいい</sup>大尉で、北海道出身の部下の上等兵に言いつけて缶詰などを私たちに持ってきてくれて、私の父にも遊びに来るように言っていた。私も子どもだからその後ろに付いて行って隊長の話を聞いていた。その人は酒が入ると口数が多くなった。「日本は負けることはない、勝つと思っているはずだが、この<sup>イクサ</sup>戦はだめだよ」と言っていた。首里が落ちる前から「負ける」と言っていたので、私たちは「この人はスパイだ」と疑っていた。隊長は「自分たちは竹槍<sup>やり</sup>しかない、こちらが1発撃つとアメリカ軍は20、30発も撃ってくるのにどうして戦えるか。アメリカ軍は民間人を殺さないから、どこに逃げようが手をあげて逃げなさいよ」と言っていた。2、3日後、隊長は「自分はもう必要がないから」と、勲章を

外した軍服(上着とズボン)を、風呂敷に包んで兄に渡していた。

その後、手榴弾も不足していたので、隊長は黄色い棒状のものを3つ束ねたものに火をつけて爆発するか試していた。だが投げるのが遅れたのか、手に持ったまま爆発して、私たちが見ている前で爆死した。

〈中略〉

#### ■親との別れ

真栄里への移動前、父が「自分たち年寄り歩いて糸満を越えることができない。君たちは若いから行けるところまで行きなさい。自分たちは稲福に帰るから」と言い、両親と西大屋(屋号)の人たちとは別れた。

終戦後にやんばるにいた時、親たちが宜野座の病院にいたということを知人から聞いて宜野座を訪ねたが、消息はつかめなかった。西大屋の人たちは生き延びた。

〈中略〉

#### ■南部を逃げ惑う

その後、私たちは喜屋武(現 糸満市)に逃げたので、真栄里の父の友人がどうなったのかはわからない。

喜屋武では集落の中に入らず、海岸のアダンの木の中に避難していた。壕はなかった。そこはよい隠れ場所だったが、私の兄嫁が抱いていた知人の男の子の頭に弾が当たって亡くなった。その子は県外に疎開する予定だったが、私の兄が可愛がっていてその子もなついており、「沖縄が良い」と言って疎開には行かず犠牲になった。その場所に穴を掘って立派に葬り、遺骨は戦後もその場所にそのままあった。

アメリカ軍の飛行機はよく連絡が取れていて、トンボ(アメリカの小型偵察機)が飛んでくると後から機銃で攻撃された。一生懸命逃げたが飛行機にはかなわないのでソテツの中に隠れた。夜はそこから島尻に突破するため海岸沿いに歩き続けた。

アメリカ軍の中にはハワイにいた日系2世も多かった。島尻に行っても壕にこもって出てこない人たちが多かったので、2世が「何もしないから出てきなさい。出ないと焼かれてしまうよ」と投降を呼びかけていた。飛行機からも投降ビラが撒かれていた。それで長い間、壕で頑張っていた人たちも出てきた。兵隊と一緒にいる人たちは兵隊の言うことを聞いて出ないことが多かった。私は逃げる方が良いと考えていた。

私は喜屋武から具志頭村の坡名城(現 八重瀬町)に出た。食べ物も何もなかったが壕

はたくさんあり、その中で避難民の家族が亡くなっていて、食料品は残されたままだった。そこにナムクジ(すりおろしたイモ)が袋の中にあり、水がないので海水を汲んできて炊いて食べたが食べられなかった。ひもじいのでそれでも食べると下痢をした。

#### ■畑の中で捕虜になる

捕虜になったのはギーザバンタから玻名城に移って畑の中に隠れていた時だった。私は近くにアメリカ兵がいることに気づかずサトウキビを食べていた。近くの畑の中に日本兵がいて、「天皇陛下万歳」と叫んで畑の中から1人も出てこなかったので、10人くらいのアメリカ兵が鉄砲をかまえて手榴弾を投げ込んだ。私たちは手をあげて捕虜になった。これが6月20日頃だった。女性たちはワーワー騒いで手をあげて出て行った。手をあげなければ手榴弾をどんどん投げ込まれたかもしれない。私たちはわからなかったが、アメリカ兵はあとから入ってきたのだと思う。

一緒にいた避難民は、日本兵に「捕虜になったらアメリカ兵に海に投げ込まれたり、並べて戦車でひき殺されたりする」と言われていたと話していた。私たちは日本兵と一緒に行動しなかった。兵隊と一緒にいたらやられていた。稲福にいた時、隊長に「民間人だと手をあげると攻撃されないから捕虜になった方がいいよ」とよく聞かされていたから、私はいつも逃げる方がいいと考えていた。

〈前略〉アメリカ軍の携帯食料が配られていた。女性たちはアメリカ兵の服を洗濯して、何もかももらって来ていた。

そこには2、3日いて、今度は佐敷村(現 南城市)の仲伊保に移動させられた。屋比久かどここに大きな事務所があって、人々はそこに車で連れて行かれて取り調べられ、民間人と軍関係者(兵隊や防衛隊など)に分けられた。兵隊と防衛隊はそこから屋嘉(現金武町)の捕虜収容所に集められていた。屋嘉では沖縄の人が内地の兵隊を相当こらしめていたという話を聞いた。

私たちは仲伊保から与那原に移動して大きな船に乗せられ、久志村(現 名護市)の二見ふたみに連れて行かれた。船の中で女性たちが「そのまま海に捨てられるのか」と言うので、「そんなことはしないよ」と話していたらやんばるに着いていた。

稲福の人たちがいるかと思って嘉陽(かよう)(現 名護市)まで行ったが、歩いての往

復は大変だった。嘉陽には稲福の人は1家族しかおらず、二見と大川(現 名護市)、特に二見に多くいた。だがたくさんの方がマラリアに罹<sup>かか</sup>って亡くなった。マラリアに罹ると2、3日に1回は激しい震えが来た。毛布が1枚しかないからみんなの毛布を3、4枚被せ、さらに上着などを重ねても震えは止まらず、1時間ほど震えていた。老人の多くが罹っていたが、私は1回しか罹らなかった。

〈後略〉

『南城市の沖縄戦 証言編-大里-』98頁～105頁掲載

① どうして、「この人スパイだ」と言ったのかな？

② 「この人はスパイだ」と言っていたのに、隊長の言っていたことを聞いたのでしょうか。

③ 捕虜になったあと、どうなったと思いますか。